

佐佐木信綱と W・シェロシェフスキの「愛国」の友情

(読売新聞記事の翻刻)

井上 紘一

解題

今は亡き吉上昭三さんは1987年、「[ヴァツフ・]シェロシェフスキは[1903年]9月中旬、青森から汽車に乗り、東京、大阪、神戸をへて長崎へ向かった。[...]その後彼は朝鮮半島から中国へ向い、天津、北京、上海を訪れる。揚子江上の船で歌人の佐佐木信綱[1872-1963]と知り合い、交友を結ぶのはこの時である」[吉上 1987:87-88]と記した。とりわけ最後の件は座談でもよく語っておられたから、耳にされた方も多いであろう。今回、吉上さんがこの件で参照されたと想定される新聞記事を手にしたので、紹介の労を執りたいと思う。

シェロシェフスキ (Wacław Sieroszewski, 1858-1945) は作家・民族誌家として知られるが、国家再建後のポーランドでは宣伝相、作家同盟議長、文学アカデミー総裁まで務めた政治家でもある。若い頃は社会主義運動に挺身してヤクート地方への12年の流謫も体験した。シベリアから戻って4年後の1900年、アダム・ミツキェヴィチ生誕百年を期してワルシャワに建立された、銅像の除幕式へ向けた檄文の起草者との嫌疑で逮捕される。再度のシベリア勤めを回避するべくロシア帝室地理協会から提示されたのが北海道におけるアイヌ調査だった。サハリン島に滞在するブロニスワフ・ピウスツキ (Bronisław Piłsudski, 1866-1918) の参加を条件にこれを受諾すると、シベリア、満洲を経て初来日を果たす。彼は1903年4月初旬に大連から長崎へ入港して、9月末か10月初めに朝鮮へ向けて神戸を出港するので、日本滞在は半年にも及んだ[吉上 1987、井上 2003、2010、シェロシェフスキ 2013]。

1939年9月1日、ドイツ軍がポーランドへ電撃進攻して第二次世界大戦が勃発する。果敢な抵抗も空しくドイツの軍門に降ったポーランドは、再度の亡国を余儀なくされた。その頃、東京のポーランド大使館にはボレスワフ・シュチェシニャク (Bolesław Szczesniak, 1908-96) が勤務していた。彼はワルシャワの東洋学院で梅田良忠から日本語を学んだあと東京へ留学し(1937-42)、日本史専攻の大学院生として早稲田大学に在籍する傍ら大使館勤務と立教大学講師もこなし、立教大では本邦初のポー

ランド語とポーランド文化を講義した(1939-42) [Dąbrowski 2000:101-102]。

1940年1月23日、読売新聞が本記事を報じると、彼は早速それを切り抜いて保存した。スクラップ記事は持主とともに英国を経て渡米(1948)、長らくインディアナ州ノートルダム大学にあったが、今はワルシャワの国立近現代文書館 (Archiwum Akt Nowych、以下 AAN と略記) に収蔵されている。

私はこれをワルシャワ在住の旧友井上久仁子さんから頂戴した。彼女には AAN でシュチェシニャク旧蔵資料を調べてもらっていたが、作業中の掘出し物として画像が届けられたので興味の赴くまま翻刻を試みた。以下に収録するのはその翻刻稿である。なお同資料には、記事に掲載された佐佐木信綱ほか2名のスナップと、寄書きされた絵葉書の写真も別途保存されている。恐らくシュチェシニャク本人が取材記者から入手したものであろう。

ところで AAN のシュチェシニャク旧蔵資料中には、東大の沼野充義さんのシュチェシニャク宛私信も5通(1984年8月17日、9月27日、11月20日、1985年4月9日、7月17日付)見出される。当時ハーヴァード大学に留学中の沼野さんは、シュチェシニャク氏が所蔵するブロニスワフ・ピウスツキ関係資料の拝借を願い出て(第2信)、その後も3度にわたり催促しておられる(帰国途上のジュネーヴから送られた第5信には、東京の住所が記されていた)から、とどのつまりは借用が叶って複写できたものと推察される。もしそうであれば、そこに件の読売記事の存在は必至だから、吉上さんは同記事を沼野さんから提供されたのではあるまいか。

シェロシェフスキの「寄書」は、ミツキェヴィチの長篇叙事詩『パン・タデウシュ』の「第一之書」農園の冒頭部を若干潤色しており、Ojczyzno ukochana. Ty / jesteś jak zdrowie, / Ile Cię cenić trzeba, / ten się tylko dowie, / Kto Cię utracił. / (A. Mickiewicz, / „Pan Tadeusz” / Jang-Tsy / 26 List. 1903 r. / Wacław / Sieroszewski のように読める。執筆地と日付は「揚子[江]、1903年11月26日」。

ミツキエヴィチの原詩は以下の通り。

Litwo! Ojczyzna moja! ty jesteś jak zdrowie;
Ile cię trzeba cenić, ten tylko się dowie,
Kto cię stracił. [Dzisiaj piękność twą w całej ozdobie
Widzę i opisuję, bo tęsknię po tobie].

(Adam Mickiewicz, *Pan Tadeusz*, Paryż, 1834)

因みに、1999年に上梓された故工藤幸雄氏による本邦初の韻文訳では「リトヴァ！わが祖国！汝（なんじ）は健康にこそ似る / その価値をしみじみ知るのは、ただ / 健康を失った者のみ。[きょう華麗なる汝の美しさを / 目に浮かべ、わたしは描きだす、わが焦がれる汝（なれ）ゆえに。]」[ミツキエヴィチ 1999 (上):17]と邦訳されている。

去る10月9日に逝去されたアンジェイ・ワイダ監督も、異郷にあるミツキエヴィチが祖国での十一月蜂起敗北を受けてのものした畢生の大作、生前最後の長篇叙事詩を1999年に満を持して映像化された。工藤さんは訳者序で「図らずも、アンジェイ・ワイダ監督による映画『パン・タデウシュ』の完成と時を同じくする一九九九年に遅れ馳せながら、この訳書を世に問うことのできたのは、大きな喜びである。なぜなら、ポーランドにとって十九世紀のミツキエヴィチと、二十世紀のワイダとは、文学と映画と分野の違いこそあれ、芸術界の双璧と呼ぶべき巨匠だからだ」[ミツキエヴィチ 1999 (上):7-8]と述懐している。

本稿付載の写真3点はワルシャワのAAN所蔵 (Akta i zbiór Bolesława Szczęśniaka, *sygn.* 1, 66 [記事], 67[スナップ], 68[絵葉書])、いずれも井上さんの仲介で入手できた。井上久仁子さんと国立近現代文書館にはこの場をお借りして感謝申し上げたい。

(いのうえ こういち)

参考文献

- Dąbrowski, Adam Grzegorz 2000 Przyczynki do biografii Bronisława Piłsudskiego w spuściznie Bolesława Szczęśniaka, *Teki Archiwalne* (Seria nowa) 4(26):99-107
- 井上紘一 2003 B・ピウスツキと北海道—1903年のアイヌ調査を追跡する、井上編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11-31、北大スラブ研究センター
- Inoue, Koichi 2010 The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903, in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2: 3-37, Faculty of Liberal Arts, Saitama University
- ミツキエヴィチ 1999 (工藤幸雄訳)『パン・タデウシュ』上/下、講談社文芸文庫
- シエロシエフスキ、ヴァツワフ 2013 (井上紘一訳) 毛深い人たちの間で、井上編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事—白老における記念碑の除幕に寄せて』77-108、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター
- 吉上昭三 1987 プロニスワフ・ピウスツキ、北海道以後—シエロシエフスキの記述を中心に、加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(国立民族学博物館研究報告別冊5号)81-97

床し歌の信綱博士

卅八年前の熱情

敗戦波蘭の友に注ぐ*

わが歌壇の元老佐佐木信綱博士とポーランド文壇の老大家とに蘇つた若き日の友情——この佳話の発端はいまから卅八年の昔に溯る、明治卅六年の初冬南支周遊の旅にあつた佐佐木博士は揚子江を溯る船中で當時ポーランド獨立運動の

志士だつたワツラフ・シエロシエフスキ氏と邂逅、一週間の船中

生活に多感な歌人と志士は意氣全く投合して舊知の如く幾夜か語り明し再會の日を心に描いて別れた、そしてその後博士は

わが歌壇の大御所になり、シエロシエフスキ氏も獨立ポーランド

の文藝院總裁になつて茫々歲月が流れポーランドはまた亡國の悲哀をなめシエ氏の消息も硝煙のなかに杜絶えてしまつた、こ

ろが佐佐木博士が遙かに恙なきを祈つた心が通じたか、數日前

東京ポーランド大使館ヘルマニアのブカレストにある同國公使館から「シエ氏は無事當地へ避難した、日本の友佐佐木博士によろ

しく」と入電があつた、スタシニツク書記官が早速この報せを

博士へ齎すと博士は嬉しさに涙さへ浮かべて早速温かい慰問の

手紙を送るとともに廿日夜同書記官を

晩餐に招き初代駐波公使川上俊藏正しくは俊彦氏未亡人ときわ

さんを交へてシエ博士ママの憶い出を語つてその無事を祝した

シエロシエフスキー氏は今年七十八の高齢、幾多の名著によつて知られる民族學者でありまた作家としても重きをなした、明治卅五年にはアイヌ研究のため北海道を訪れこの機会に日本文化への深い共感をもち『赤穂義士』『波から波へ』など日本に取材した名作を出してゐる

佐佐木博士との奇縁はこの訪日の歸途のこと、博士の家信の繪葉書にシエロシエフスキー氏がペンを執つて

「愛する祖国よ、汝は健康の如く、その價の幾何なるは、汝を失ひしものよみぞ知る」

と祖国の愛國詩人ミツキユウイチの詩の一節を書けば佐佐木博士は所持した白扇に

「大江の水いまだしきもときしあれば陸ひたす時なからめや」

とポーランド再興を暗示する和歌をしるして親しき友に與へ惜しき別れを告げたのだつた、本郷西片町の自邸で佐佐木博士は異郷の友の若き日の面影を偲びながら語つた

「あの頃のわたしは朝にも夕べにも愛國の歌ばかりを歌つてゐた時だから祖国回復の大志を抱いたシエロシエフスキー氏の情熱に燃える瞳はわたしの胸に喰入るやうに感じた、二人で寄書した繪葉書はいまもわたくしの篋底深く大切にしまつてゐる、とにかく無事で心の雲が晴れ渡つたやうに嬉しい」

*昭和十五年一月二十三日付『讀賣新聞』所載記事。典拠としたのは、ワルシャワの国立近現代文書館蔵B・シユチエニヤク旧蔵資料中に見出されたスクラップ記事である。

大使、副所長が離任。大感謝!!

このたびツイリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使=写真左・中左=と、ポーランド広報文化センターのマルタ・カルシ副所長=右・中=が任期を終えられました。

大使は着任早々、本会創立 25 周年祝賀会(2012.11.3)にお越しただいて以来、北海道をこよなく愛し何度も来札され、プロニスワフ・ピウスツキ顕彰事業(2013.10.19-20)や、2 回にわたる東京例会などでたいへんお世話になりました。大使の送別会(2016.9.28、ポーランド大使館ホール)に出席して4年間のご厚誼に深く感謝申し上げます。

マルタさんには創立 25 周年記念コンサート(2012.5.12)や、第 2 回東京例会(遠藤郁子ピアノサイトル、2016.6.23)などでたいへんお世話になりましたので、センターの「ポーランド風忘年会」(2016.12.7)の機会に、7 年にわたる任期中のお力添えに厚くお礼を申し上げます。(安藤厚)



Cyril Kozaczewski 前大使 / Marta Karsz 前副所長



寫眞 上は右から川上未亡人、佐佐木博士、スタシユニツク氏と(圓内)シエロシエフスキー氏
下はシエ氏と佐佐木博士合作のはがき

